

叙覽之而勅嗟峨身哉此軍之諸人依之有嗟峨見之名云々足輕明神昔狩人也或時離寵妻有悲傷故常見亡妻之鏡思之相模如見其亡妻故曰相模といへるはいとくみだりなりわきて鏡の説は字義になづみたるいみじき妄説なり皇國のいにしへ音もていへる事なし縣居大人は身狹の國なり西國北國にては前後もて國を分け東國にては上下もて分る例あればこは身狹上の略なりと云れつれど穩ならず上下と分つにも又例ある物をや國名には上某下某といふはあれど某上某下といふはなしされど郡名にはあれどそは異なり古事記日代宮の段の弟橋比賣命の歌に佐泥佐斯佐賀牟能袁怒邇云々とあり

〔類聚名物考 地理〕相模 さがみ

思ふに相模國は足柄の二郡みな山にしてその外も多くは山のみにして海にそへる所わづかに平地なれば嶮上の意にていふ成べし土佐の國もとき坂の略語と見ゆれば此も同じ意成べし

〔古事記 中景行〕爾其后名弟橋比賣命白之妾易御子而入海中○中爾其后歌曰佐泥佐斯佐賀牟能袁怒邇毛由流肥能本那邇多知氏斗比斯岐美波母

〔古事記 傳 二十七〕佐泥佐斯は相模の枕詞とは聞ゆれどもいかなることとも未考へ得ずされ

みに強ていはず佐泥は國名にて佐泥は眞と云と聞き其なまがづらむか即眞字を佐泥と云はれか佐泥は眞と云と聞き其なまがづらむか即眞字を佐泥と云はれか
 とは云格なり又萬葉十國に佐泥は眞と云と聞き其なまがづらむか即眞字を佐泥と云はれか
 くに分て相模武藏とはなれるなるむ駿河武藏は又相模より分れたることを上にて云泥るが如し賀
 牟子歌佐泥佐斯御吉野万葉集左宿禰前許曾と云例の如し延佳佐下新上脱泥字乎下巻輕
 句にかなはす又契冲佐相模の枕詞なり未詳今按に舊事紀井に此紀に武藏を胸刺と書たり
 ば牟泥佐斯を略て牟佐斯といふは云なれば今相模胸刺の牟を略て云るに武藏を胸刺と書たり
 ど此記に武藏は牟邪志とこそ書たれ胸刺と書たれ武藏より小しき事記に武藏を胸刺と書たり
 刺と書たれ武藏より小しき事記に武藏を胸刺と書たり